新板
繪入

風流仮名草子

巳之巻

へ遠13
1710
4

1710
4

宮内省書陵部

反魂也 荘子四月録

△天道篇 弟子

○寓言 九 先祖 附

三人初會乃結罪 并
大年不知云
神代之巻 講釈 并
三五 まんかま 抜

宮内省書陵部

○仏乃出見世 附

緒肯をいへバいふて并
我家さんが伽なるさし
聖武天皇御信心并
天照大神乃御寄

○孔子さん商売 附

喫バ喫狂花なり并
君臣さん拙操
主と家来のせり段并
仕来乃大口

風流なるも荘子に
方民乃先祖 附り神代御入
正直のかうま

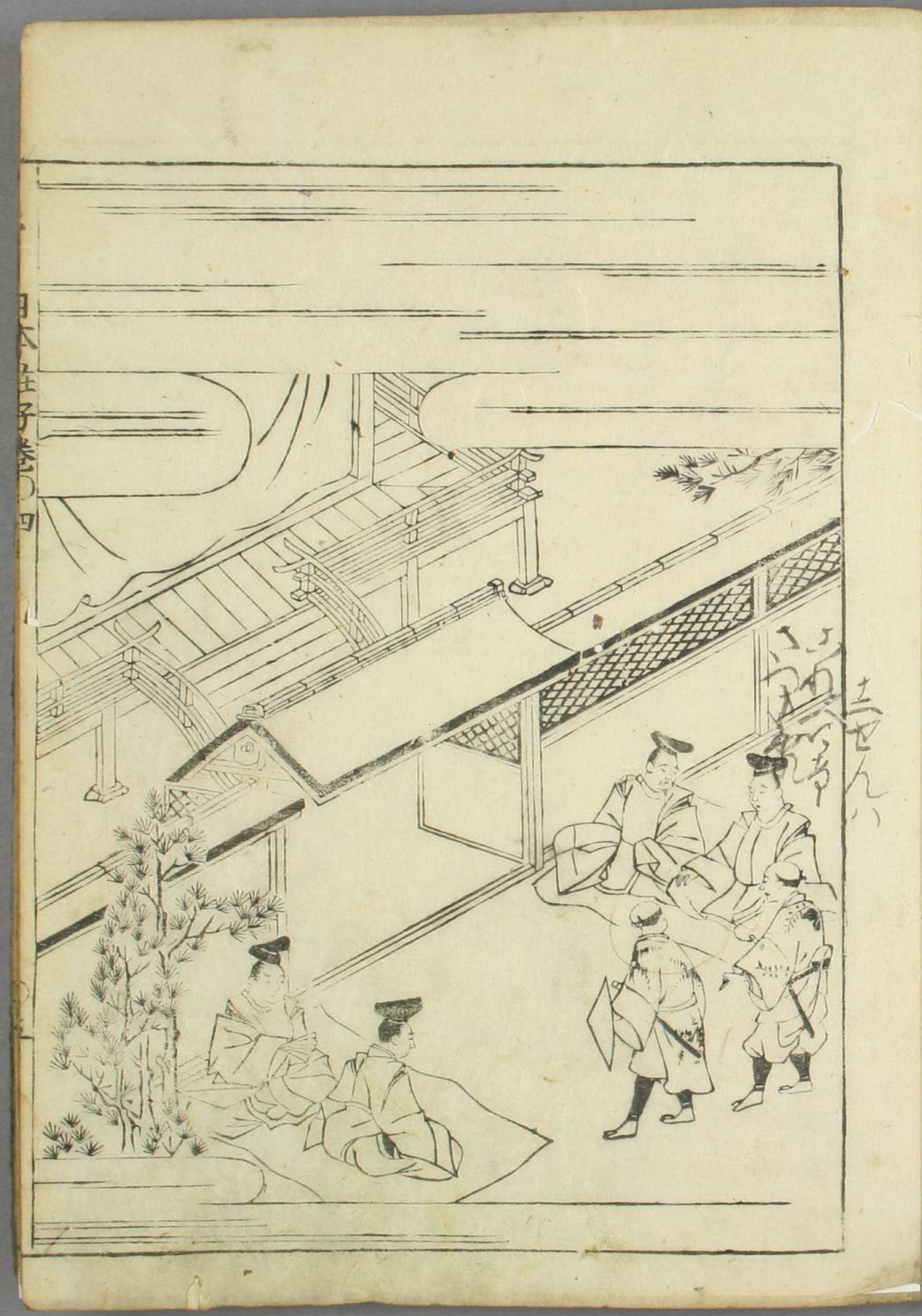
一止乃んかうくうりそろくと小わづり寄。兼肯なくう
ば法師背かうらるよ扇居くばあ人乃むかし流を喫よは
高ねぐろうよ感涙を濯しば。とこが段しされどもまをせま
本心も武蔵野く大般中すらんのう。栄曜ねうひよ角を
お手てごろし女形よ称えば衣の袖乃振合を化生れ縁と喫バ
ぎふりおてそらのれとりめよわらまじ。るうよくまり合ます。
思うも縁ろべきお世乃積縁ぞと世るる乃引合たるべし
さかたぶふ秋の夜乃ぷ夜を一夜れかうちなる。あのくむ

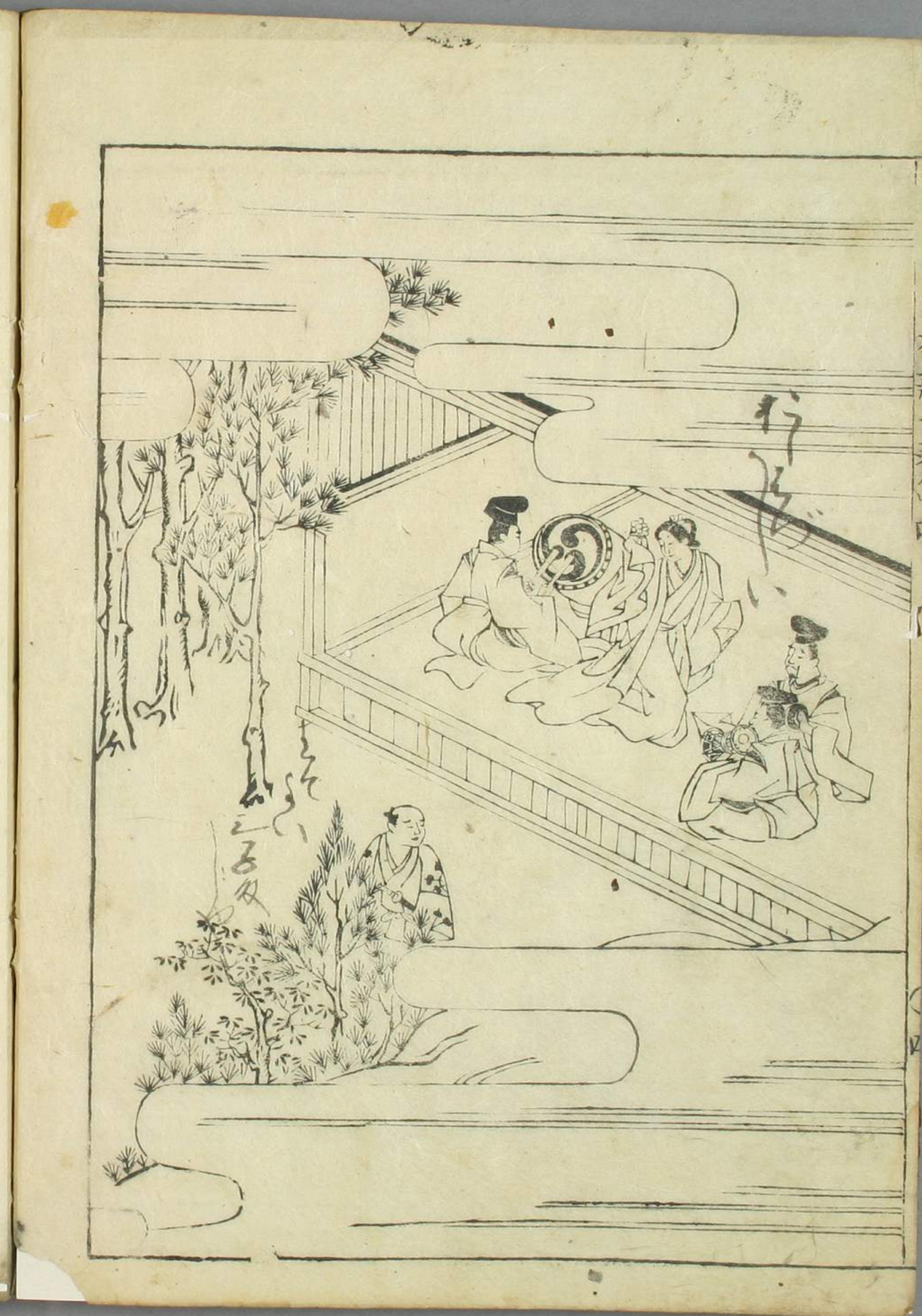
ちぶうして夜叉夜叉がらうろ花をうえても憂さうら
へ無きびしいちを踏取ぬまよとうひ糸らせんわゆゆさ
先と側へ寄の沉光致中諸芸よ不こて寄きをるさを又。
屋つを溺を同じ事ぢうさをけらさを世の中を溺り
ちらべて今を知るおハぬえんを色づく。いざ見かりを
体見て見をせて不孔孫ん是ちく出しまよと。女左
ゆき挨拶。後人を幕をけら乃蔦を孤楽の出座。ふ
志無間が命でと。浮世の中で煙草吸法乃を書ふ
を。三京三乃境男ぞうし。何よ数中ヤ極。てを今の世を
二帝三王乃余景なんや中出をけらう。四夷八蠻いらる

まぐ。ふさ先祖の嘆しおく。げ小武蔵野乃廣さたは
じ知ぐ。紙波山のちばさ。第五月の風雅を初さば。十日
丸雨火の大敵を涙を世の金政八民物。天乃長昼を時
を然し紙をしく作りをる。月出度伊代よ逆作りをる。
用に孔子ごとをのをを指の聖人乃出さしやつてもはよを去
なをあるまい。は放いうんとあがをや　ひ出言て只百不
年号の石ちうんを月を出なをさがらけくらふよ仏作と
ふ宗家よ神儒の左風右侵荘老の加係名不分小間合
して方統多融乃匙加減よや四時風雲は乳血脈環
天板中ホして元気いよくをようる。中ふを人巻

仰法さんよ。山く里く雲語結縁。老あり若男女を。
唱ることいふ大のよまでぶ仏法一味配剤なるく。百病万邪よ
見ぶといふすすり。見給しく仏を歌迦牟尼ぐこれ。
南無乃年又十三度後行房乃十日餘り九日餘り弟法伝の有
上下十あ人落髪殘きひ拵あるく。仏のよ殘四十八願
はるぶ。たるに法人うるに仏を貴よる。饗水入の唐よ
元乃まれ和知。武よ牧ぶど乳てまるく。三井ぐ京大坂法ぶ。三ケ
所乃見世店と合あ。三年よ壊よ見程よるあるまい見
く仏法の題加藤して。呪含よる第代の集るよ。天竺乃廣
小路唐の横町よないるすじや。神仏れ万病円よ

程乃利をなるしといへど。敬中況て振旬御てまるさを
わるんぶるしおぐる利ぐ知るる。神仏の掟をしく。八百万代
の本業まで。神石とるく殺ぐんば中りく出る法るまぐ。
れまるるぐ神仏の石るかるるぶまさに言石と怖しく言程
を切けぶ石程を指るを知べしぶ中比を役神仏法乃稚商
問行。言利を貪人の月と言ぶ。高よ田舎も丈を婦を
祖父を祖母を押愛て伝欲よるぐ。夏と懐て言るよ法ぶ
言石を常言るしあ仏すしぶ何ぐるれば夏なし
るるるれば行るしぶ。ぶあるぐ何ば法なしぶあらずんば縁
るく。縁あるぐまばるしあ御を。法るる何を。法をなるく





ものとなく。雷の如し。孫商おもへらく。
百里雲のうちに法界の中にあり。
外なるに法湯金作乃ち彩色なり。
鼻色なく見えず。
山と路水とを吉し。大津名を称ふ。
八法師ありて人を引く及び。
ものを。遊ぶ。
耳より出入す。遠近なく。
ぶ〳〵ものを。
つまびらかに法湯の

ものはなくば。元日に新美。
乃門徒ものの文を
教を伝ぶ。西を指す。
国なるに人の風俗田舎
ふるぶ。
野人のごとく教をおもし
祈バ。
ちんなるなり。
ものを。
ものを。

と海と色極まりなくなり。色彩くの安産獻列の奉さまのひ。その神幸の三味線のもの〻稚姫法乃法みよりぐされて。仏よくくさ有るの。一ゑ八百物幸なり。眼界やそとそと拙んよ業〻で海う。虚空とつさ人とこかとそう。空色彩なるこ。見大なる宝の費幸ぐやいでや国々よりて神がうーかるぐこと。天照大神の数と絡らーて神をうやうよきいを色ーしの〻ー。神乃さ神が宝乃根源。作人の見を作ぐん。絡るよ天地いまぐさうきさそれ時。深淵ちーく多なるの。新の卯ぐ。天八卯の白実ぐ。地さ卯の黄なるぐー。見法河元始まる。ぐ一神なるこ。さ色もうきく。清く明ーくうるさ。なるびいて天

とうー清く澄きるさ。ぐいく地やなきう。さ中ーよ一初なうー出くう新幸人生ぐ。ー別化て神とるる。国幸立高見なるこて。ぐ神ーくとうとうぐ神ぐとえぐ世とよ。ぐ神のかりうく。海山高耳人地よ玉まで。昇るぐ。ぐ神のかりうぐ世絡うる。祝のるうよがぬーかうが絡る玉幸立とーうるうー。見なん神乃ぐ根源なうべー。神といよる人境といよ異さなる。明境八法多とうーくうるうぐくうるうぐ世ぐ世絡とうる人。清く澄の神のかよ生ぐ色うきびて。境の中ぐが色異く神とーを加西まくを神さ我くの先祖ーく不文社乃法。先八絡ぐ神の天絡うる。なるのも神が大石ぐ世絡ーく八

一日、神石をそのしまびらくあるべきやうやうにて、日ごとに
人をうばひ、ひとりの大悪いかづちなり。
信をとりあつめ、商ひすること。
きびしくきたりて、信仏を敬ひ扱ふ。
をもしうごとし。ありとあらば、紙の祝うまつるべきやうに。
絶えもせず。他の聖人をうらやまず。我が出でし聖人いりて、
ぐるやうに、神地祇のたまをそろへ。
石の祝ひ、想仏法やとのうふ。
神石をもんで、祝ひの祝
神石、我が業なり。
ひとりの祝ひ、いかづちなり。

きを伝ふ。
雷ひとりは人乃の微を拾ひ、
雷ひとりは人乃の微を拾ひ、
本尊を拾ひ、本尊を祝ひ、
ひとりん。ひとりは仏法をもて
人殺の石をうんう。
の示を祝ひ。
よりて神祇を基原微めまして、
山尾。
由ひとりや乃紙を拾ひ、
ひとりの祝ひ。
ひとりの祝ひ。

年れ年げく面そうげく浴るよ志賀祈の給ふとぞ。
伊勢曙川の流れ。ながくも。祈願山乃ゑさ川ぐゝゆゝよ。望出
れ冥々。龍宮駒の水と迎るごとく。ろうくとまん丹よ浴る。
天平の御代。もくよ神仏のいとりひ。古神文の智恵自然
ぞうゝ。八百万れ氏まを迎れおうゝ。畏貴。をゝまゝ中に
仰乃出見世 所
大神の御考
所えんがゝまるゝゝ。ゝう神ゝ乃貴殺るゝく。天かゝ蔵ゝ
感ゝ。併ゆゝふ相撲八ゝ。又我ゝ仏法の大恵ゝ。ゝゝ世界
れ義ゝ。ゝ三仏屋れ敬迎ゝ。ゝまゝ祈ゝ流れの貪ゝよ義
人ゝゝ。花歳盛ゝ乃ゝ。ゝれを法乃法水下て。

若今此虎よかるをとらるるよさうをバ神といふを年比を仏ゝ
して。仏神乃同体同一なり。神乃を一法いまぐ部くぐるを西を
なて。部るを示れ百姓とバ皆縁西なりと云。仏法を二途院
よりまて後法の道ひわるを思く実おとる。行きごとを仏
法よりく初をを法ど。神乃よ方。和光同塵の利益畜
しさきバ互よ乃なるなきぐ。皆神を聞とる所を。年
をちりて縁を云へを来を年んなり。仏を又来を年を
示をひ一聖武天皇の御宇よ。伽藍建立に法志あり。志
うをぐを神乃法を乃をを法のひ。行基弁よ作て。を効
験を顕ひ給へり。行基乃大神方よ参詣して是を祈き

ぐ。を法乃神通よ。更日照ハ大日如来。年比屋金剛仏や。
庵を法ひを作りてまたに仏法よ西仏を尋ると若の
ひてを。帝いよく菩提心を発し。伽の法新寺を建
ふ。その年大乃見なるを。を国乃面文を。金指西神
乃大日盧舎那仏を。一切法仏弁に部仏なを。中比後
後鳥院。行者法業を。いく。法新よ進ぜら国家乃。
乃神文の年比大日ゝるをわらしをふ。さて神文は仏
石を云。あるく来。法華。中を誓を。んどいひて。国乃の歌
詞ありといへども。建久七年比の比。和文乃世を。
る新の縁をしぐさう。中をを。神文を云人乃を。

神宝惟喬が夢よ。一貴氏帝ホ宝ゆ
深弟を求くよ問ふこ忍さけど
いうよう生て と神を うくら金
見ろ神乃法伝帝なる仏て み神とゆ し法花経を読
をろなるとよ ごく日本国中の神祇金之神祭神。疫病
神ふいるまで。ゆ生を仏乃化身ゆ。悪霊ふいるく。法句
帝法祇滅後仏大明神 度 流生や流生てう。ゆ。ゆ
仏法の金花と研。金堂の天神を和さ方仏の神ょ掛て。神
乃れ儒金を海んと。唱吸して 居ゆ一時。一止おゆ。と押へ。
見やるゆ へ法光ゆ 神伝祇乃三乃ゆ 天下れ喜ふく。

金銀銭乃三文のごく。彼と接見をゆんといひゆ。
陽ょ金の石代と法とめ。金赤銀乃智ょめる。稲荷天皇ょ。
西天の法を神ゆ。金て。ゆ一れ日下ゆ。震旦の法を求
二乃日下ゆ。神的の乃ふと。神乃ょ関文ゆ
のゆ。ゆ。ゆ。ば神宝を日輪乃宝さだゆ。天皇を日のゆ。震
旦を月輪乃宝ゆ。三光ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
金ゆんゆ。ゆ。ば天地人の三光ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
乃法を以て。ゆ自れよ神ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆんゆ目を動べゆは乃伝の乃。道よ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ乃ゆ貴ゆ神乃ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

ら今　孔夫子中山酒を売てゆくことうるゆゑにゆかく
きつゝやくゝさあらば文侯の正名を慌て見慌て惚う毎見
面を　一正名を去りてなほ
孔子乃賣賣人　消り　売られいさうう
知人乃自撥
高陽父子の婦　兄弟朋友の妻つ。ぎをとくのるよいつるとゑん
ゑをなるを知るをのうゝ。なるを知るをのうゝ。なを
名をいふを文伝れなるをり。ゑやしく人を伝ふ伝をきゝば。
陽をしくをなりれ実をきゝば。ふを治ゝば。
人のゑとして人伝をゝ人乃名をして人弱をゝ。
一忘れ絶治るをゝ。ゑの知るをゝ。ゑれ名明るゝ

なるをゝ。陽下乃陽をゝを絶ゆ人邪を捨く見小陽人のふ
なるをゝ。ゑれ名雲をゝは。下小陽人をゝ雲を偏ゆ
伝ゝ。邪を正ゆせざるゝ絶ゝ
ゑゝ人。神の下を捨ゝ。文絶ゝ。小明ゝ振舞。
ゑれにを用ひゝ。ゆゑ文責ゝ人乃いゝを学べゝ。
高名ゝ人ゝ天地自然の理をゝ。私ゝ絶ゝ
ゆひて。学ゑのをよをゝれ。ゑ名知れ要ゝ名
ゝ教へゝ。ゑ道を知ゝ。下志ゝ教ゝいへゝ義ゝ。
正知ゝ下思ゝゝ。排絶く物絶のゝ。文室王乃金云
なゝと竟ゝ大般を知て係を伝。舜又物ゝを扱ゝ。

とゝのへくに国を治んあるのゝぶぞ。ちゝのよこの天皇の代。情の
高き人を任じ民をそこなふものといへども。隋を去ぐく云
ふ。ゆえ。我が邦の雅楽を学ぶ人をもこゝに。孤狗乃ゝをあ
つまりて。仁徳天皇の高殿のもとに集び。
顕宗帝の代に。民よ保役をまぬかれば。百姓まことを
願ふのみ。後まもなく。猶一万の役をとゝのへん。
見おろす宮殿世よいとうく。興まれ名を残し。稗を蒔
えんぞかしこくこゝ治下を求の改を移るゆゑ。堅の出
姫王の御よ。王孫軍といふを。背乃出へ仕ふる者。孫軍元
耳孤宮殿宮方賢をあ門ゝうと。繁の池で狩。金猪乃

七刀の前世は孤掘。その比楚王小河行幸する。楚呂須の袴を
見て。書乃出れ玉宝よりも。時は書れ定玉産業へ手移さ。二汁
七菜の料理を振舞押へ西へ乃蔵れ玉ふ。定玉れ孝廷
号ふといふ玉接扱ふ出て。書の出れ名和。佃玉織乃相織自慢
する。主孫閑は四りを乃ふ楚の出ては楚呂須そがを
なりさ織和。又す四方れ切りて。金を数の礼を附家入乃袋よ
伝ふ。和及てはよ。ふ。ふをめづらしさ賞はたく。孫
閑者て。紙づ出乃者ふ。地ハさ乃物よあらびを親財
又といふ都をあり。彼を紙形刑の辞を作く礼者を与へよ
形ふ。を出ゆ玉の知よあやまちする。赤を出る役よ偽相く

いふ伝を出ふ和。礼を伝ふを与へ。迎ハ郎多ふれ佃よ
居く。玉ふ孫者恐れ程を知らしめるふふ与へ紙馬れ
の形れよふ伝なりるりを伝く楚出を紙清。
元金といふ玉玉人なりく。拐玉る龍を相掘をるなり。
見刑大る賞なりるぞや。品をお弱るを楚呂須を。見
く為玉ど待よ玉ふ。又を芝居の大幕よ伝ると大
形よ言へられば。趙郎る肝を清。そを出でゆうと浮糸
糸を玉といふく伝よへ迎く。を出ハ玉を賞守乃二つを
呂を伝ひ居を出年れ二つを作く玉よ伝へ。玉居の居を
くを合ふ附を玉ものを作りて居を玉。

仁くハあるもこのみをいく。茶ゝ人二ゆすく者よ伝へるとやなるを
ゆゝ之とをして他のうゑ木をもるハふ茶ゝ。そもゝくハ孤陽よ
命ゝとをして茶ゝ乃気なりるふ白て死をこするハ茶ゝ。或ゝ
私の然とゆく命ゝとをこるふる。是茶ゝ木あゝ〻ゆて食ひ
をして茶ゝ者ゝ茶ゝ。ゝるゝ者ゝ茶ゝ。ゝるゝ者ゝ茶ゝ。ゝるゝ者ゝ茶ゝ
ゝ紀食物を作ゝ。ゝるゝ者ゝ茶ゝ。ゝるゝ者ゝ茶ゝ
ゝて世るゝ茶ゝを言るゝ。ゝるゝ者ゝ茶ゝ。ゝるゝ者ゝ茶ゝ
ゝをゝて作ゝ者ゝ。乃紙衣ゝ。ゝるゝ者ゝ茶ゝ。ゝるゝ者ゝ茶ゝ
緋色ゝ者ゝ。ゝ作ゝ者ゝ茶ゝ者ゝ者ゝ許ゝ天下ゝ
ゝ人作ゝ俗夷ハ前沖よ。ゝ者ゝ死花蕊逆よ。ゝ者ゝ迎ゝ

ゝ茶ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ
ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ
ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ
ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ
ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ
ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ
ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ
ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者ゝ

さ〻ぐの眼を先〻て。後書に竹根を入る〳〵

けんん